群教セ	G50 － 03
	平28.261集
	音楽－小

感性や創造性を発揮し即興的に表現しながら、思いや意図をもって音楽づくりをしようとする児童の育成

――ICT機器と図形楽譜の活用を通して――

特別研修員　平井　美千代

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

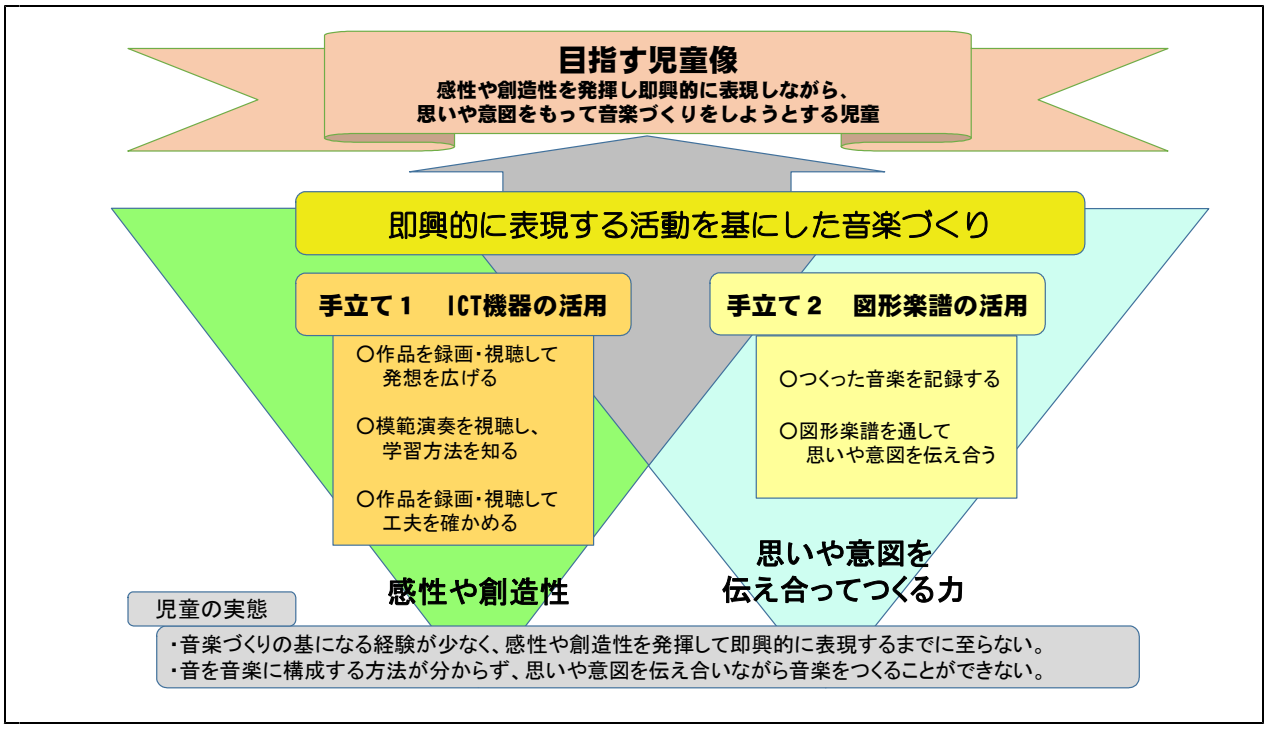
「はばたく群馬の指導プラン」には、群馬県の課題として「音楽の要素を手掛かりに、音楽づくりや創作をすること」とあり、音楽づくりの指導の充実が求められている。そして、課題解決に向けて伸ばしたい資質・能力として小学校中学年では、「思いや意図をもった音楽づくりができる」ことが示されている。

本学年の児童は、音楽づくりの学習として、音を並べてつなぎ簡単な旋律をつくったり、拍節リズムを組み合わせてリズム音楽をつくったりしてきた。しかし、表現や鑑賞の学習に比べて音楽づくりへの興味・関心は低く、苦手意識をもっている児童が多い。その要因として、音遊びや音づくりなどの音楽づくりの基礎となる経験が少なく感性や創造性を発揮できなかったり、活動に不安があったりすることが考えられる。また、音楽の要素や仕組みを生かして音を音楽に構成する音楽づくりの技能が身に付いておらず、友達と思いや意図を伝え合いながら音楽をつくることができないなども考えられる。

そこで、ICT機器や図形楽譜を活用することで、児童が自らの感性や創造性を発揮し様々な発想をもって即興的に表現したり、思いや意図を伝え合いながら自分にとって価値のある音楽をつくったりすることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

児童が自らの感性や創造性を発揮し様々な発想をもって即興的に表現したり、思いや意図を伝え合いながら自分たちにとって価値のある音楽をつくったりすることができるために､次の二つの手立てを講じた。

＜手立て１　「ICT機器の活用」＞

・模範演奏を視聴し、学習方法を知る。（プレゼンテーションソフト・電子黒板）

　教師が見本作品を演奏した動画を教材化（プレゼンテーションソフト）し、視聴させ活動のイメージをもたせることによって不安を解消したり、ねらいにせまる活動が行えるようにしたりする。

・作品を録画・視聴して、発想を広げる。（デジタルカメラ・プレゼンテーションソフト）

　児童が即興的につくり出した音を録画し、それらを音や演奏方法の種類ごとに分類した教材（プレゼンテーションソフト）をつくる。それを視聴させることによって、即興表現のための多様な発想、感性や想像力を養うことにつなげる。

・作品を録画・視聴し、工夫を確かめる。（デジタルカメラ）

　児童の演奏を録画・視聴し、作品を客観的に評価させることによって、練り直す活動に必然性をもせ、思いや意図をもって積極的に活動が展開できるようにする。

＜手立て２　「図形楽譜の活用」＞

・再現可能な音楽にするために、線や図形などを用いて音や音楽を図形楽譜で表す。

・互いの思いや意図を共有して音楽をつくるために、つくった音楽を図形楽譜に記し、それを用いて伝え合う活動を行う（図１）。

図１　図形楽譜のイメージ

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　ICT機器を用いて、模範演奏や友達の演奏を視聴することによって、活動方法を捉えられたり発想を広げられたりして、自らの感性や創造性を発揮して即興的に表現していく意欲に高まりが感じられた。

○　ICT機器を用いて自らの演奏を録画・視聴することによって、作品を客観的に見つめ直すことができ、作品を練り直して深めていく学習に必然性をもたせることにつながった。

○　作品を図形楽譜を用いて記したことによって、再現可能な音楽にすることができ、児童の学習を深めたり､図形楽譜を介して思いや意図を伝え合って音楽づくりをしたりすることにつながった。また、言葉のみによる伝え合いでは、友達の思いや意図が理解しきれず活動に消極的になりがちだった児童も、積極的に音楽づくりに取り組むことができた。

２　課題

○　ICT機器として今回録画に使用したデジタルカメラは、視聴するには音量が小さく聴き取りにくいため、音量を確保して録画したり視聴したりできるように「たしかめの場」などと称した場所をつくる。

○　工夫の練り直しを考える際に、工夫の効果のわかりにくさや面白さに重点が置かれ、表現したいイメージからかけ離れてしまうことがあったので、常に表現したいイメージを意識させるために、図形楽譜の中に、「表現したい森のイメージ」を記しておく欄を設ける。

実践例

１　題材名　「思いをふくらませて音楽をつくろう」（第３学年・２学期）
　　教材名　「森の音楽をつくろう」

２　本題材について

学習指導要領　A表現（３）音楽づくり

イ　音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもって音楽をつくること。

〔共通事項〕（ア）音色、速度、強弱、音の重なり
（イ）問いと答え、反復、変化

本題材は、表現したい森の様子をイメージし、思いや意図をもってモチーフとなる音を一人一人がつくる学習からはじまる。次に、つくったモチーフを音楽の要素（重なり、強弱、速度）や音楽の仕組み（始め方終わり方、反復、変化など）を工夫しながら音を音楽にしていく。つくった音や音楽は、デジタルカメラを使って録画・視聴したり、図形楽譜を用いて記したりして、思いや意図が表現されているかどうかを確かめながら練り直し、表現したい音楽をつくりあげていく活動である。

以上のようなことから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	表現したいイメージをもち、即興的に表現したり、音楽の要素や仕組みを生かしたりして、思いや意図をもって音楽をつくることができる。	
評価規準	関心・意欲・態度	思いや意図をもち、即興的に表現したり、音楽の要素や仕組みを生かしたりして、「森の音楽」をつくることに興味をもって取り組んでいる。
	表現の創意工夫	音楽の要素や仕組みを工夫し、思いや意図をもって、森のイメージを音や音楽にしている。
	表現の技能	つくった音楽を、表現力豊かに演奏することができる。
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第１時～２時	・学習内容をつかみ、「森の音楽」をつくることに興味をもち、表現したい森のイメージをつくる。（ICT機器の活用） ・つくった森のイメージから、表現したい音のイメージを膨らませて、即興的に試しながら、思いを表現する音をつくる。（図形楽譜の活用）
課題追求	第３時～４時	・グループごとに、つくった音を音楽の仕組み（反復、問いと答え、変化）や音楽の要素（重ね方、強弱、速度）を工夫して、思いや意図をもって「森の音楽」をつくる。（図形楽譜の活用）
	第５時	・つくった音楽の作品の発表会を行い、思いや意図を表現することができているかどうか確かめ、課題を明確にする。（ICT機器の活用）
	第６時～７時	・前時の活動で挙げられた課題を確かめ、音楽の要素（重ね方・強弱・速度）や音楽の仕組みの工夫を練り直し、思いや意図がより一層伝わる音楽につくりあげる。（ICT機器の活用・図形楽譜の活用）
まとめ	第８時	・つくった音楽を演奏し、発表する。（図形楽譜の活用）

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全８時間計画の第６時に当たる。前時の発表会で見付かった課題を確かめ、音楽の要素（重なりや強弱、速度）や音楽の仕組みの工夫を練り直し、思いや意図がより伝わる音楽につくりあげる学習である。課題を明確にもつこと、互いの思いや意図を理解し合うことを通して、作品の練り直しができるように、以下の二つの手立てを講じた。

手立て１　ICT機器の活用

デジタルカメラで録画した発表会の演奏を視聴し、課題を客観的に確かめることを通して、作品を練り直す必要性を感じる。

手立て２　図形楽譜の活用

練り直したい部分を明確にし、互いの思いや意図を焦点を絞って話し合うことができるようにする。また、話し合ったことを楽譜に修正して書き込んだり付け加えたりすることによって、工夫点を明確にし、演奏に生かすことができるようにする。

４　授業の実際

本時の展開（全８時間の６時間目）

【ねらい】表現したい森のイメージにより近づけるために、音楽の要素や仕組みを工夫し、表現を練り直し深めることができる。

＜ICT機器を活用する場面＞

前時に他のグループから指摘された課題や自分たちで演奏しながら感じた課題を、デジタルカメラの映像を視聴して客観的に評価をし、確かめることができた。また、何度も繰り返して視聴することによって新たな課題を見付けることができ、作品の練り直しに必要性を感じながら取り組むことができた。

ICT機器を活用し、デジタルカメラの映像を視聴し、課題を確かめる場面（図２）	
他のグループから指摘された部分を視聴して、 S1：「さっきのところだよ。強くやったはずだけど全然かわってないね。本当だね。」 S3：「え、よくわからなかった。もう一回みせて。」 S2：「強くするだけじゃなくて、速くしてみたらいいんじゃないかな。」 視聴して気付いたことに対して、 S3：「さっきの、何をやってるかよくわからなくない？」 S4：「だんだん重なるようにしたはずだったけど・・・。」 S1：「とにかく、やって別の方法を考えてみようよ。」	 図２　デジタルカメラの映像を視聴して確かめる

＜図形楽譜を活用する場面＞

デジタルカメラの映像を視聴して確かめた課題を、図形楽譜と照らし合わせて確かめられた。そして、「こんな工夫をしたけれど伝わってなかったから、こう直した方がいいと思う」などのように、具体的な改善点を伝え合いながら、図形楽譜に加筆・修正をしていた。グループによって、①いろいろな工夫を演奏して試したり、練り直した工夫の効果を確かめたりしながら、図形楽譜に加筆・修正を加える方法と、②ICT機器で視聴したことと図形楽譜を照らし合わせて考え直して加筆・修正し、演奏して確かめる方法とに分かれた（図３，４，５）。

課題の図形楽譜の部分を見ながら、具体的な工夫の改善をする場面（①の方法）	
S1：「楽器の仲間で分けて、重ねてることがわかるといいよね。」 S2：「鉄琴とグロッケンでやった後、間をあけてみようよ。」 ～演奏して、確かめる～ S2：「ちゃんと切って音がなくなってから、ぼくたちが入ればいいんじゃないかな。」 ～演奏して、確かめる～ S3：「いいと思う。書いておこう。」 ～図形楽譜を修正する～	 図３　演奏して確かめてから楽譜を修正

課題の図形楽譜の部分を見ながら、具体的な工夫の改善をする場面（②の方法）	
S1：「このところが短くて分からなかったから、2秒じゃなくて、一人5秒ずつにしてみよう。」 S2：「長くするだけじゃなくて、強弱も変えてみようよ。ｆではっきりさせよう。」 S3：「いいと思う。書いておこう。」 ～図形楽譜を修正する～ ～演奏をして確かめる～	 図４　楽譜に修正を記入してから演奏

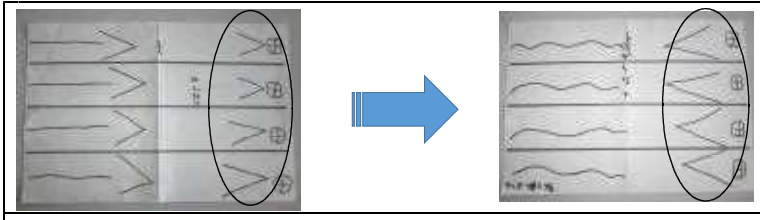
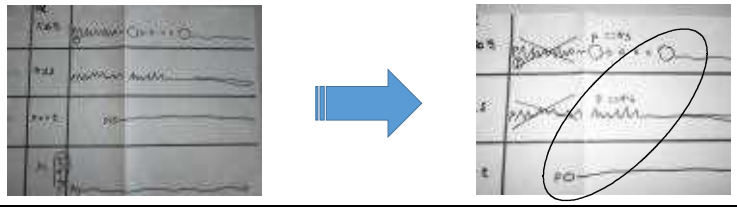
	○表現したい森のイメージ 「にぎやかな朝の森」 ◎加筆・修正された工夫 盛り上がって終われるように、クレッシェンドになった。
	○表現したい森のイメージ 「動物たちが集まってきて遊ぶ」 ◎加筆・修正された工夫 だんだん動物たちが増えていくように、だんだん重なることにした。

図５　図形楽譜への加筆・修正の実際の様子

５　考察

今回の実践では、ICT機器の活用として、デジタルカメラを用いて作品を録画・視聴する手立てを講じた。すると、「演奏できていたつもりだったけど、伝わっていなくて残念だったから、もっと工夫したくなった」や「決めたことと違うことを演奏していることに気付いた」など、自分たちの演奏を客観的に評価して活動することにつなげられた。そのため、本時の活動に必要性を感じ、積極的に取り組むことができた。

また、図形楽譜の活用を手立てとして講じたところ、一学期に行った「紙の音楽をつくろう」の学習よりも、話合いの流れが理解できなかったり演奏方法を覚えていることができなかったりした児童が、「図形楽譜を見ると、忘れてしまっても思い出せたので、いつもできてうれしかった」や「友達が言っていることがわかったので、一緒に演奏することができてよかった」という感想をもち、達成感を味わいながら活動に取り組めたことがわかった。

児童が感じたことを即興的に表現しながら、思いや意図を確かめ合って音楽をつくっていく場面は、一瞬の音を聞き逃したり、話合いの流れが掴めなかったりして活動に取り組めないことがある。それらの状態をこれら二つの手立ては解消することができ、効果的な手立てであったと考える。しかし、工夫の練り直しを考える際に、工夫の効果のわかりにくさや面白さに重点が置かれ、表現したいイメージからかけ離れてしまうことがあったので、図形楽譜の中に、表現したい森のイメージを記しておく欄を設け、常にそのイメージを意識しながら練り直しの活動ができるようにする必要がある。

二つの手立てを講じることによって、児童の音楽づくりへの興味・関心は高まり、「自分で音をつくったり、みんなで重ねたりすると面白かった。色々な音を試したくなった」や「強弱や速度を工夫してつくった音楽を発表して、知ってもらうのはうれしい」という感想が聞かれた。事前・事後アンケートからは、音楽づくりは楽しいと感じた児童が、２２％から９０％に増えた結果となった。

多様になるグループ活動において、デジタルカメラでの録画や図形楽譜は、指導者が評価する際にも役立った。映像や図形楽譜を照らし合わせて児童の考えを見取り、必要な支援を考えることができるので、活動の焦点化にもつながった。